四季録

帽子

学生帽以来かぶることのなかった帽子。時代的にもそうであった気がするが、20年ほど前からか？若い人たちが新しいファッションとして盛んに帽子を取り入れるようになった。そんな中、僕にもかぶるきっかけとなる出来事があった。

２０１１年、久万美術館で企画展を開いてもらった折のこと。「Ｊｕｎｊｉ＝Ｆｒｉｅｎｄｓ Ｃｏｎｃｅｒｔ」と銘打ち、レゲエのギャラリーコンサートをすることになり、親しいアーティスト奏者のこだま和文君、リトル・テンポの４人、それとＤＪスーパーブルーが東京から来てくれた。僕も彼らの演奏に１曲加わることになり、そこで思い付いたのが帽子。ミュージシャンぽくとの下心で、初めて灰茶色の中折れ帽を買ったのだ。

彼らの人気で初めて訪れる人も多く、絵に囲まれた会場は老若男女３００人を超える観客で埋まった。前夜に２、３度リハーサルしただけのぶっつけ本番。普段触らないピアニカを吹いたのだが、うれしくもおおいに沸いたのだった。

ライブは良かったのだが、せっかくの帽子に問題が。デカ頭に合うサイズがなく、妥協して買った代物。無理やりかぶっては最後までしっくりこず。浅はかカッコつけの報い。思い通りにはいかないものです。

近頃の若者を見て「そんな小顔では歌舞伎役者にもなれねえぞ」などとうそぶくうちに、その役者までが小さな顔で懸命に見得を切っている。ああ、時代は変わる。ともかく、出かける時には帽子が必須アイテムとなり、季節に合わせ幾つか買った。もちろんサイズを合わせてである。

数年後、僕をサポートしてもらっているクラブの会長でもある友人のＮから、黒色フェルトのバスクベレーが届いた。彼はスペインに凝っていて、土産に買って送ってくれたのだ。絵かきの帽子はベレーといったイメージが長くあったせいで、コッ恥ずかしく敬遠していたが、歳も歳、気に入ったものは堂々と身につければいい！と。

ピレネー山脈西部、スペインとフランスにまたがる地域に暮らすバスクの農民が、性別年齢問わずかぶるベレー帽。独自の言語をもち、文化や伝統を育む独立心の強いバスク民族。絵かきたちは、その気概のようなものに惹かれ同調したのではないか。芸術を通じて、既存の枠組みに収まらない新世界の開拓者たらんとする彼らが、自由人の象徴としてかぶるようになった。などと自分勝手に想像をたくましくする。

ある日、その黒ベレーに黒縁眼鏡といういでたちで夜の街に出ると、店主曰く「手塚治虫みたいですね」「えっ！あぁそうなのか、違うんだがなぁ…」。

（吉田　淳治・画家）

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。